

神経性無食欲症傾向の高い女子大学生の自己不一致について —描画を用いた検討—

森 優衣・石田 弓

Regarding the self-discrepancy of female university students
with high anorexia nervosa tendencies: A study using drawings

Yui Mori and Yumi Ishida

An individual diagnosed with Anorexia nervosa displays symptoms of a fear of becoming fat, a desire to be thin and a distorted body image. The existence of people with anorexia nervosa tendencies (AN tendencies), who partially display the symptoms of anorexia nervosa, has also become a problem due to the generalization of diets in recent years. Since AN tendencies are common among females, it has been suggested that it is related to female gender roles, but the type of female that is idealized has not been objectively tested. This study examined which female body type is idealized by female university students who display high AN tendencies. In the first study, a questionnaire survey was conducted to clarify the relationship between AN tendencies and “self-discrepancy,” which is a discrepancy between the ideal self and real self or the ought self and real self. In the second study, “Ideal and real self-image drawings” were conducted to examine the self-discrepancy expressed in drawings. As a result, no relationship between self-discrepancy and AN tendencies were found in the questionnaire survey. However, examination of the drawings suggested that female university students who display high AN tendencies tend to idealize a body type that is not entirely skinny, but emphasizes female sex appeal, and have a large discrepancy with their real selves.

Key words: anorexia nervosa tendencies, self-discrepancy, “Ideal and real self-image drawings”

問題と目的

神経性無食欲症と神経性無食欲症傾向

神経性無食欲症（Anorexia Nervosa：以下AN）は、摂食障害の一分類であり、その特徴として、痩せ願望や強い肥満恐怖、身体像の障害、病識の欠如といった症状をもつ。ANは90%以上が女性

であるとされ、思春期・青年期に発症することが多いが、近年では低年齢化が進んでいる。AN を含めた摂食障害の背景には、痩せた体型を称賛する社会的圧力といった社会的要因や、家族の機能不全などの家族的要因、性役割に関する問題といった個人内要因など、次元を異にする様々な要因が関係していることがこれまでの研究によって明らかになっている（大森，2005）。

近年、AN を含めた摂食障害は増加傾向にある。また、食事制限や運動といったダイエットが一般化していることから、AN の病理群に至らないまでも、痩せ願望や身体像の障害といった AN の症状を部分的にもっている AN 傾向の存在も指摘されている。AN 傾向を AN と連続変数的に捉える考え方もあり、広く健常者を対象とした研究が必要とされている。

摂食障害と女性役割

摂食障害は女性に多い障害であることから、社会・文化的要因である女性役割との関連が多く研究されている。浅野（1996）は、女性がダイエットをするのは社会に受け入れられるためであるとしている。齊藤（1999）は、大学生・社会人を対象に性役割分業に対する意識を検討し、痩せを希求する女性がより伝統的な女性役割を望み、かつ性役割観と性役割期待の認識に差が認められないという結果を得ている。また、齊藤（2004）は、1960年代から今日までの摂食障害と女性役割の研究を概観し、以下の3つの指摘に分けることができるとしている。それは（a）社会情勢の変化に伴う女性らしさの希薄化という社会・文化的要因を問題とする指摘、（b）女性役割特性は社会から期待される役割と個人が望む役割に葛藤が生じやすいため摂食障害の遠因となっているのではないかと指摘、（c）女性役割に過剰に適応しようとすることによって摂食障害を発症するのではないかと指摘である。以上のことから、女性のダイエットの背景には、社会に受け入れられたいという欲求があり、社会に受け入れられるために伝統的な女性役割に過剰適応しているのではないかと考えられる。本研究では、浅野（1996）を踏まえて、齊藤（2004）の（c）女性役割に過剰に適応しようとするによって摂食障害を発症するのではないかと指摘のもとで研究を進める。

古山（2003）は、「女性らしさ」を細かく分類し、身体的特性は、母体を想起させるふくよかな身体と対男性としての女性のスリムな身体に分類している。また、心理社会的特性は、母親的役割、対男性としての女性役割、男女に共通した役割に分類された。そして、各分類に対する望ましき得点と摂食障害傾向得点との相関を調べた結果、女子大学生では、ふくよかな身体に対する望ましきと摂食障害傾向との間に負の相関がみられた。馬場・菅原（2000）は、瘦身願望は「女性性の保持」、「魅力のアピール」、「自己不全感からの脱却」といった青年期女性の多様な欲求を、「瘦身」というひとつの単純な手段を用いて満たそうとすることによって高まるとしている。以上から、ふくよかな身体を否定し、痩せた身体によって女性らしさをアピールしたいために AN 傾向が高くなることが推察される。また、AN 傾向の高い女性は、痩せることで女性役割に適応しようと考え、女性らしい痩せた身体を理想としているのではないかと推察される。そこで、AN 傾向をもった女性が、自分の身体や将来についてどのような理想をもっているのかを検討していく必要がある。

AN 傾向と自己不一致

理想自己とは、Rogers（1959）によると「個人がそうありたいと強く望んでおり、それに最も価値を置いている自己概念」のことを意味し、現実自己（実際の自分のイメージ）との差異が小さい

ほど適応的であるとされている。しかし、川上・石田（2011）は、理想自己と現実自己の差異が大きくても、差異に対して積極的に反応する者は自尊感情が高く、理想自己を志向する積極的な意識や行動によって適応が保たれていることを示唆している。

自己不一致理論（Higgins, 1989）では、自己を現実自己、理想自己のほかに、義務自己（こうあるべき自己）を加えた3つに分類し、個人が抱く自己不一致の種類によって経験されやすい感情が異なることを予想している。理想自己と現実自己の不一致が経験されると、「自分は肯定的な存在ではない」という心理的状态を介して、抑うつ、不満、悲しみといった落胆と関連した感情が生じやすく、義務自己と現実自己の不一致が経験されると、「自分は否定的な存在である」という心理的状态を介して不安、恐怖、罪悪感といった動揺と関連した感情が生じやすい（小平, 2002）。小平（2002）は、理想自己と現実自己、義務自己と現実自己の差異を測る自己不一致測定票を作成し、これによって測られた義務自己は、完全主義と相関がみられたとしている。また、Strauman, Vookles, Berenstein, Chaiken, & Higgins（1991）による健常群を対象とした自己不一致と摂食障害の関連の調査では、現実自己と義務自己の差異と拒食行動との間に相関がみられている。さらに、摂食障害傾向と完全主義に相関がみられた（横山・小山, 2005）ことから、AN 傾向と義務自己の間には相関がみられると考えられる。

しかし、こうした自己不一致に関する研究では、質問紙や自由記述による検討は多くなされているが、投映法を用いたものはほとんどみられない。投映法では、無意識的な水準における理想や現実を捉えることができると考えられており、自己不一致に関してもこれまで明らかにされてきた意識的な水準での知見とは異なる理解が深まる可能性がある。そこで本研究では、投映法の中でも特に描画法を用いて AN 傾向の高い女子大学生の理想自己と現実自己について検討する。

AN 傾向と描画

三根（1990）は、摂食障害の病理群に対して人物画や自由画を描かせ、AN ではナルシスチックセルフイメージ、部分的身体像、輪郭線の強調といった描画特徴を見いだしている。横山・金子・熊代・青野（1988）では、AN の病理群に対して自分の現在の体型と理想の体型を描くよう指示した自画像において、AN の中核群では裸体を描き、女性的外観がみられなかったのに対し、周辺群では女性的であり、衣服を着た自己像がみられている。このことから、中核群においては身体的自己愛傾向が強く、周辺群においては社会的自己愛傾向が強いことが示唆された。また、森・石田（2013）では、女子大学生を対象に人物画テストを行い、AN 傾向の高い者は低い者に比べて人物画における性差表現が少ないという特徴がみられている。本研究では、AN 傾向の高い女子大学生の理想自己と現実自己の様相を明らかにするため、横山ら（1988）を参考に、理想の自分と現実の自分を描くように教示する描画法「理想—現実自己像描画」を考案した。そして、どのような点が理想であるかなどを描画後の質問（Post drawing inquiry: PDI）によって尋ね、理想の自分と現実の自分の差異（自己不一致）について具体的に明らかにする。

本研究の目的

本研究では、非臨床群である一般の女子大学生を対象に、AN 傾向と自己不一致の関連について検討することを目的とする。研究1では、質問紙調査によって AN 傾向が高い女子大学生と低い女

子大学生を比較し、自己不一致に違いがあるかどうかを量的に検討する。研究2では、女子大学生における「理想—現実自己像描画」の一般的な特徴を明らかにした上で、AN傾向の高低によって描画特徴にどのような違いがみられるか、そして、それが何を意味しているのかを質的に検討する。

AN傾向と自己不一致に関する量的検討（研究1）

目的

研究1では、女子大学生が意識的な水準で感じている自己不一致とAN傾向の関連を量的に検討することを目的とする。自己不一致については、自己不一致測定票を用いて、理想自己と義務自己がAN傾向とどのように関連しているかを明らかにする。また、AN傾向に影響を及ぼすと考えられる理想体型と現実体型についてCounter Drawing Rating Scaleを用いて測定し、理想体型、現実体型、および理想体型と現実体型の差である痩せ願望が、それぞれAN傾向とどのように関連しているかを検討する。

方法

調査対象者 女子大学生34名を対象としたが、質問紙への回答に不備のあった1名を除いた33名（平均年齢21歳、 $SD=1.71$ 、18～25歳）を分析対象とした。

調査時期 2014年10～12月にかけて調査を実施した。

質問紙の構成

(1) 日本語版 Eating Attitude Test-26 (EAT-26)

Mukai, Crago, & Shissalk (1994) が開発したANについて測る尺度。「摂食制限」、「大食と食事支配」、「肥満恐怖」の3つの下位尺度によって構成され、26項目からなる。「全くない」から「いつもそう」の6件法で回答を求めた。原版では「全くない」、「まれに」、「ときどき」までは0点とし、「しばしば」、「非常にひんぱん」、「いつもそう」をそれぞれ1, 2, 3点として合計しているが、6段階で評定し、摂食障害の症状を連続変数として捉えることで健常者における摂食障害傾向の測定が可能となる利点がある（吾妻・大野・稲富・田中・太田, 2002）。そこで、本研究でもこの方法を採用した。EAT-26得点が高いほど、AN傾向が高い。

(2) 自己不一致測定票

小平 (2002) が開発した簡易版の個性記述的手法であり、理想自己と現実自己の不一致を「理想自己得点」、義務自己と現実自己の不一致を「義務自己得点」として測定するものである。まず、「あなたが『こうありたい』と考えているあなたの状態を思い浮かべて下さい」と教示し、調査対象者に理想の自分を思い浮かべさせ、その姿を「～な人間（の人間）」という言葉に続く形で5つ記述するよう求めた。続いて、それぞれの項目に対してどの程度当てはまるのかを「1. 全くあてはまらない」から「5. 非常に当てはまる」までの5件法で評価するよう求めた。次に、「こうあるべき」と考えられる自分（義務自己）に対しても同様の作業を求めた。

(3) Contour Drawing Rating Scale (CDRS)

Thompson & Gray (1995) が開発したボディイメージを測定するための質問紙で、痩せた体型か

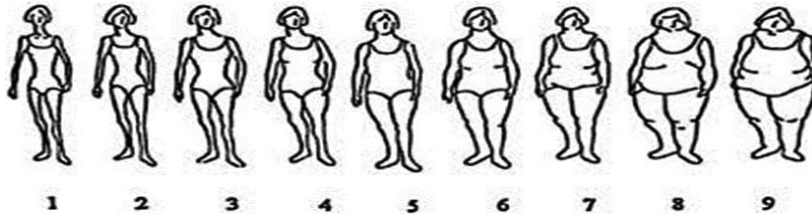


Figure 1. Counter Drawing Rating Scale (CDRS)

ら太った体型まで9段階で女性の体型イラストが描かれている (Figure 1)。本研究では、理想体型と現実体型の差をより細かく検討するため、田崎(2007)を参考に、体型イラストの下に Visual Analog Scale (VAS) を配置した。回答者は VAS に斜線を引くことによって評定した。VAS の左端を 0 とし、VAS と斜線の交点上までの距離を評定値とした。本研究では、CDRS を 2 枚実施し、理想体型と現実体型をそれぞれ評定するよう求めた。現実体型の評定値 (以下、現実体型得点) から理想体型の評定値 (以下、理想体型得点) を差し引いたものを痩せ願望得点とした。痩せ願望得点が大きいくほど、体型についての自己不一致が大きい。

(4) フェイス項目

フェイス項目として、年齢、肥満度をあらわすボディマス指数 (Body Mass Index ; BMI) を算出するための身長と体重を記入するよう求めた。また、最後に健康に関する質問として、これまでの大きな病気の有無を尋ねた。

調査手続き 個別法あるいは最大 2 名の小集団法で実施した。所要時間は 10~20 分であった。

結果

調査対象者の基本データと相関分析 調査対象者の年齢、身長、体重に加え、BMI、EAT-26 得点、理想自己得点、義務自己得点、理想体型、現実体型、やせ願望の得点の平均値と標準偏差を Table 1 に示した。また、各指標について、Pearson の積率相関係数を求めたものを Table 2 に示した。BMI と現実体型得点の間に強い正の相関がみられた ($r=.71, p<.01$)。また、BMI と痩せ願望得点の間に強い正の相関がみられた ($r=.63, p<.01$)。理想自己得点と現実自己得点の間に強い正の相関がみられた ($r=.57, p<.01$)。理想体型得点と現実体型得点の間に中程度の正の相関がみられ ($r=.40, p<.05$)、現実体型得点と痩せ願望得点の間に強い正の相関がみられた ($r=.82, p<.01$)。

AN 傾向と自己不一致 EAT-26 得点によって調査対象者を AN 傾向高群 ($n=12$)、中群 ($n=11$)、低群 ($n=10$) に分類した。各群における EAT-26 得点、BMI、理想自己得点、義務自己得点、理想体型得点、現実体型得点、痩せ願望得点の平均値と標準偏差を Table 3 に示した。そして、それぞれにおいて 3 群で 1 要因分散分析を行った結果、理想体型得点において有意傾向がみられた ($F(2, 30)=2.91, p<.10$)。そこで、多重比較を行ったところ、AN 傾向高群では低群よりも理想体型得点が小さく、より痩せた体型を理想として評定していた。

Table 1
各指標の平均値と標準偏差 (n=33)

	平均値	標準偏差
年齢	21.0	1.55
身長	1.6	0.05
体重	52.3	6.68
BMI	20.7	2.21
EAT-26得点	51.6	15.47
理想自己得点	2.9	0.78
義務自己得点	3.0	0.71
理想体型得点	2.7	1.08
現実体型得点	4.9	1.86
痩せ願望得点	2.3	1.74

Table 2
各指標間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7
1. BMI							
2. EAT-26得点	-.05						
3. 理想自己得点	.09	-.02					
4. 義務自己得点	-.07	.20	.57 **				
5. 理想体型得点	.22	.21	.16	.11			
6. 現実体型得点	.71 **	.22	.05	.05	.40 *		
7. 痩せ願望得点	.63 **	.23	-.04	-.02	-.20	.82 **	

** $p < .01$, * $p < .05$

Table 3
AN傾向各群におけるEAT-26得点・BMI・理想自己得点・
義務自己得点・理想体型得点・現実体型得点・痩せ願望得点の平均値 (SD)

	AN傾向高群 67.80(13.7) (n=12)	AN傾向中群 47.18(2.23) (n=11)	AN傾向低群 37.10(3.32) (n=10)
BMI	20.93(2.67)	20.76(2.27)	20.34(1.70)
理想自己得点	2.78(0.82)	2.91(0.89)	2.98(0.66)
義務自己得点	3.22(0.80)	2.87(0.70)	3.16(0.59)
理想体型得点	2.15(1.22)	2.74(0.85)	3.20(0.94)
現実体型得点	5.17(2.01)	4.94(1.82)	4.61(1.88)
痩せ願望得点	3.02(1.65)	2.20(1.60)	1.41(1.79)

考察

AN 傾向と理想自己・現実自己の関連 相関分析の結果から、理想自己が高いほど義務自己も高くなると考えられる。このことから、「こうありたい自分（理想自己）」と現実の自分との差異が小さいほど、「こうあるべき自分（義務自己）」と現実の自分との差異も小さくなることが推察される。これは小平（2002）を支持する結果である。一方、EAT-26 得点と義務自己得点の間に相関はみられなかった。これは現実自己と義務自己の差異と拒食行動の間に相関がみられた Strauman et al. (1991)

とは異なる結果であった。小平（2002）では、本邦における女子大学生は義務自己を重視せず、理想自己をより重視するか、どちらも重視するとされている。これに従えば、本研究の調査対象者も義務自己を重視せず、理想自己をより重視する傾向のある本邦の女子大学生であったため、AN 傾向と義務自己の関連がみられなかった可能性がある。

一方、肥満度を示す体格指数である BMI が高いほど、CDRS における現実の体型を太っていると評価しやすく、痩せ願望も強いことが示された。鈴木（2014）は、痩身志向の背景にあるボディイメージの問題を主に 2 つにまとめている。1 つ目は、客観的な体型と自身の体型として認識しているボディイメージが一致せずに、自身の体型を過大視しているという問題である。2 つ目は、自身の体型として認識しているボディイメージに対して理想のボディイメージが痩身の方向に偏っているという問題である。本研究では、BMI が高いほど、客観的な体型よりも自身の体型を太っていると認識するというボディイメージの問題があるため、CDRS では痩せ願望得点が高くなったと考えられる。しかし、EAT-26 得点と各体型得点や痩せ願望得点には相関がみられなかったことから、AN 傾向よりも自身の客観的な体型をどのように認識するかという主観的な問題が、痩せ願望の強さや体型認知の偏り、ひいては肥満恐怖などに影響しているのではないかと考えられる。

AN 傾向と自己不一致 理想自己得点、義務自己得点、現実体型得点および痩せ願望得点では AN 傾向 3 群で差はなく、AN 傾向と自己不一致の関連はみられなかった。しかし、AN 傾向高群は低群と比較して、より痩せた体型を理想の体型とみなす傾向にあった。このことから、本研究でも AN 傾向が高い女子大学生は、理想のボディイメージが痩身の方向に偏っているという問題（鈴木, 2014）を抱えていることがうかがわれた。

「理想—現実自己像描画」による AN 傾向と自己不一致についての検討（研究 2）

目的

研究 2 では、理想自己像と現実自己像の 2 枚の自己像を描かせる「理想—現実自己像描画」を考案し、女子大学生の一般的な描画特徴を明らかにした上で、そこに自己不一致がどのように表れるかを検討することを目的とした。また、AN 傾向の高さを反映しやすい描画特徴についても検討した。なお、本描画法における女性らしさの表現の特徴を事前に明らかにしておくため、予備調査を行った。

方法

調査対象者 研究 1 と同じ 33 名の女子大学生のうち、研究 2 のみ実施できなかった 1 名を除く 32 名（平均年齢 21.03 歳、 $SD=1.57$ 、18～25 歳）が調査に参加した。

調査時期 2014 年 11 月～2015 年 1 月にかけて調査を実施した。研究 1 で体型に関する質問紙に答えており、描画においても体型が意識される可能性があるため、順序効果を考慮して、研究 1 から 10 日以上以上の期間を空けて描画に関する調査を実施した。

調査用具 A4 判画用紙 2 枚、B 鉛筆 2 本、消しゴム、PDI を記載した質問紙。

描画後の質問 本法に独自の PDI を作成した（Table 4）。回答は自由記述。

Table 4
PDIの項目

- 理想の自分の絵について
 - ・この絵のどこに理想を表わしましたか？
 - ・描きにくかったところはありますか？
 - ・どこが一番気に入っていますか？

- 現実の自分の絵について
 - ・この絵のどこが現実の自分に近いと思いますか？
 - ・描きにくかったところはありますか？

- 理想と現実を見比べて
 - ・一番違っているのはどこだと思いますか？
 - ・一番似ているところはどこだと思いますか？

- 最後に、あなたはこの理想の自分にどのくらいなれると思いますか？
パーセンテージで教えてください。

Table 5
形式分析に関する評定項目

形式分析	
大きいサイズ	抹消
小さいサイズ	横向き
位置	詳細さ
切断	省略
陰影	運動

調査手続き 個別法で行った。「あなたの理想の自分を描いてください。顔だけでなく、全身を描くようにしてください。これは絵の上手下手を問うものではないので、自由に描いてください。時間は10分前後で描いてください」と教示した。理想自己像を描き終わった後、「次に、あなたの現実の自分を描いてください。顔だけでなく、全身を描くようにしてください。これは絵の上手下手を問うものではないので、自由に描いてください。時間は10分前後で描いてください」と教示した。2枚の描画後、PDIを実施した。自由記述に対して、詳細を尋ねるための質問をいくつか加えた後に、調査を終了した。所要時間は20～40分であった。

「理想—現実自己像描画」の評定項目

本描画法の形式分析に関する評定項目は、高橋・高橋（2010）の人物画テストを参考に設定した（Table 5）。一方、女性らしさの表現に関する評定項目は、高橋・高橋（2010）における性差表現を表す項目のうち、女性に関わるものを参考にした。しかし、これらだけでは現代女性における女性らしさの表現を評定するのに十分でないことを考慮し、以下の予備調査を行った。

予備調査

- ・調査対象者 心理学を専攻する女子大学院生9名（平均年齢23.11歳，SD=0.78）を対象とした。
- ・調査用具 A4判画用紙1枚，B鉛筆1本，および教示を印刷した質問紙。
- ・調査手続き 調査用具を封筒に入れて配付し，宿題法で実施した。課題1では「今から，あなた

に女性らしい人の絵を描いてもらいます。絵の上手下手を問うものではないので、気楽な気持ちで描いてください。しかし、いい加減に描くのではなく、できるだけ丁寧に描いてください。写生したり、何かを見て描くのではなく、自分の思ったように描いてください」と教示した。描画後の課題2では「先ほどの絵を見ながら、どこに女性らしさを表現したか記述してください。できるだけ詳細に書いてください」と教示し、自由記述で回答させた。

・女性らしさの表現に関する評定項目の選定 課題2における女性らしさの表現に関する自由記述の内容とその出現率をTable 6に示した。そのうち2名以上の回答が得られた項目と高橋・高橋(2010)を参考にした項目を加えたものを女性らしさの表現の評定項目とした (Table 7)。

結果

「理想—現実自己像描画」の一般的特徴 描画特徴の評定は、筆者らが行った。形式分析に関する各評定項目について、調査対象者全体における出現率を求めた (Table 8)。その結果、理想自己像で身体部位の「抹消」が多くみられた。また、2つの自己像のサイズを比較したところ、全体の約9割がほぼ同じサイズであった。さらに、2枚の自己像における女性らしさの表現に関する各評定項目について、調査対象者全体における出現率を求めたところ (Table 9)、女性らしさの表現のほとん

Table 6
予備調査で得られた女性らしさの表現の出現率(%)

服装	ヒールのある靴	6(66.7)	髪型	髪が長い	7(77.8)
	スカート	4(44.4)		パーマをかけている	5(55.6)
	ワンピース	3(33.3)		整えた髪	1(11.1)
	アクセサリ	2(22.2)		カールした前髪	1(11.1)
	ノースリーブ	1(11.1)		ヘアアクセサリ	1(11.1)
	胸元の開いた服	1(11.1)	サラサラのストレートヘア	1(11.1)	
	ロングスカート	1(11.1)	体型	胸	3(33.3)
	ブラウス	1(11.1)		ウエスト	2(22.2)
	ドレス	1(11.1)		脚	1(11.1)
	ふんわりした服	1(11.1)		細身・華奢	1(11.1)
フリルの靴下	1(11.1)	丸みがある		1(11.1)	
鞆	1(11.1)	鎖骨		1(11.1)	
シンプルな服	1(11.1)	首が長い		1(11.1)	
顔	まつ毛が長い	4(44.4)	仕草	細すぎない	1(11.1)
	唇	3(33.3)		軽く組んだ手	1(11.1)
	まつ毛が濃い	2(22.2)		そろえた足元	1(11.1)
表情	化粧	1(11.1)		手の広げ方	1(11.1)
	笑顔	1(11.1)			
	優しそう	1(11.1)			

Table 7
女性らしさの表現に関する評定項目

顔	衣服・装飾品	体型
表情	ワンピース	胸
目がパッチリしている	スカート	ウエスト
まつ毛	ブラウス	
鼻	ヒールのある靴	
唇	アクセサリ	
髪型		

どが、現実自己像よりも理想自己像に多くみられた。特に「表情」、「目がパッチリしている」、「まつ毛」、「ヒールのある靴」、「胸」、「ウエスト」では、2倍以上の差がみられた。他にも、PDIにおける「描画に示された理想自己になれると思う確率」の平均値は、高群 43.18、中群 49.55、低群 65.0であった。EAT-26 得点とこれらの確率について相関分析を行ったところ、負の相関がみられ($r=-.51$, $p<.01$)、AN 傾向が高いほど理想自己になれると思う確率が低いという結果となった。

AN 傾向と「理想—現実自己像描画」の関連 研究1と同様に EAT-26 得点によって AN 傾向高群、中群、低群に分類した。各群における理想自己像と現実自己像の形式分析に関する各評定項目とサイズの比較、および女性らしさの表現に関する各評定項目の出現率を Table 10~12 に示した。

形式分析の結果、理想自己像では、顔など部位の「抹消」が高群に多く、中群・低群では少なかった。逆に「詳細さ」と「運動」は低群に多く、高群・中群では少なかった。一方、現実自己像では、顕著な群間差はみられなかった。また、AN 傾向と2つの自己像のサイズの比較では、高群と

Table 8
形式分析に関する各評定項目の出現率(%)

	理想自己像	現実自己像
大きいサイズ	2(6.3)	2(6.3)
小さいサイズ	5(15.6)	4(12.5)
位置	3(9.4)	4(12.5)
切断	0(0)	1(3.1)
陰影	2(6.3)	2(6.3)
抹消	9(28.1)	3(9.4)
横向き	2(6.3)	3(9.4)
詳細さ	5(15.6)	3(9.4)
省略	3(9.4)	3(9.4)
運動	4(12.5)	4(12.5)
理想>現実		2(6.3)
理想=現実		28(87.5)
理想<現実		2(6.3)

Table 9
女性らしさの表現に関する各評定項目の出現率(%)

	女性らしさの表現	理想自己像	現実自己像
顔	表情	26(81.3)	13(40.6)
	目がパッチリしている	14(43.8)	6(18.8)
	まつ毛	9(28.1)	4(12.5)
	鼻	2(6.3)	0(0)
	唇	7(21.9)	4(12.5)
	髪型	24(75.0)	22(68.8)
衣服 装飾品	ワンピース	3(9.4)	3(9.4)
	スカート	16(50.0)	11(34.4)
	ブラウス	2(6.3)	7(21.9)
	ヒールのある靴	15(46.9)	2(6.3)
	アクセサリ	6(18.8)	1(3.1)
体型	胸	7(21.9)	3(9.4)
	ウエスト	10(31.3)	1(3.1)

Table 10
AN傾向各群における形式分析に関する各評定項目の出現率(%)

	理想自己像			現実自己像		
	AN傾向高群 (n=11)	AN傾向中群 (n=11)	AN傾向低群 (n=10)	AN傾向高群 (n=11)	AN傾向中群 (n=11)	AN傾向低群 (n=10)
大きいサイズ	1(9.1)	1(9.1)	0(0)	1(9.1)	1(9.1)	0(0)
小さいサイズ	0(0)	3(27.3)	2(20.0)	0(0)	2(18.2)	2(20.0)
位置	0(0)	0(0)	2(20.0)	1(9.1)	0(0)	3(27.3)
切断	1(9.1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(10.0)
陰影	0(0)	1(9.1)	1(10.0)	0(0)	1(9.1)	1(10.0)
抹消	5(45.5)	3(27.3)	1(10.0)	2(18.2)	1(9.1)	0(0)
横向き	0(0)	0(0)	2(20.0)	0(0)	0(0)	3(27.3)
詳細さ	1(9.1)	0(0)	4(40.0)	0(0)	0(0)	3(27.3)
省略	2(18.2)	2(18.2)	0(0)	2(18.2)	2(18.2)	0(0)
運動	0(0)	0(0)	4(40.0)	0(0)	0(0)	4(40.0)

Table 11
理想自己像と現実自己像のサイズの比較の出現率(%)

	AN傾向高群 (n=11)	AN傾向中群 (n=11)	AN傾向低群 (n=10)
理想>現実	0(0)	0(0)	2(20.0)
理想=現実	11(100.0)	10(90.9)	7(70.0)
理想<現実	0(0)	1(9.1)	1(10.0)

Table 12
AN傾向各群における女性らしさの表現に関する各評定項目の出現率(%)

	理想自己像			現実自己像		
	AN傾向高群 (n=11)	AN傾向中群 (n=11)	AN傾向低群 (n=10)	AN傾向高群 (n=11)	AN傾向中群 (n=11)	AN傾向低群 (n=10)
表情	6(54.5)	10(90.9)	10(100.0)	4(36.4)	5(45.5)	4(40.0)
目がパッチリしている	5(45.5)	7(63.6)	2(20.0)	1(9.1)	3(27.3)	2(20.0)
まつ毛	4(36.4)	6(54.5)	2(20.0)	2(18.2)	2(18.2)	0(0)
鼻	1(9.1)	0(0)	1(10.0)	0(0)	0(0)	0(0)
唇	2(18.2)	4(36.4)	1(10.0)	2(18.2)	2(18.2)	0(0)
髪型	9(81.9)	8(72.7)	7(70)	8(72.7)	7(63.6)	7(70.0)
ワンピース	2(18.2)	1(9.1)	0(0)	2(18.2)	1(9.1)	0(0)
スカート	5(45.5)	5(45.5)	6(60.0)	5(45.5)	2(18.2)	5(50.0)
ブラウス	5(45.5)	1(9.1)	1(10.0)	1(9.1)	1(9.1)	0(0)
ヒールのある靴	7(63.6)	4(36.4)	4(40.0)	5(45.5)	2(18.2)	1(10.0)
アクセサリ	1(9.1)	4(36.4)	1(10.0)	1(9.1)	0(0)	0(0)
胸	5(45.5)	2(18.2)	0(0)	1(9.1)	2(18.2)	0(0)
ウエスト	8(72.7)	2(18.2)	0(0)	0(0)	1(9.1)	0(0)

中群の9割以上で差がみられなかったが、低群のみ理想自己像が大きいものが2割ほどみられた。

AN 傾向各群における女性らしさの表現に関しては、理想自己像では、女性らしい「表情」が中群・低群よりも高群に少なかった。しかし、「胸」や「ウエスト」の強調は、中群・低群よりも高群に多くみられた。一方、現実自己像では、顕著な群間差はみられなかった。

各群に典型的な描画を Figure 2~4 に示した。高群では、理想自己像よりも現実自己像の体型が太く描かれ、いずれの「表情」も暗いものが多かった。中群では、理想自己像と現実自己像の違いが少なく、どちらも「表情」が明るい笑顔のものが多かった。低群では、理想自己像において将来の自分の姿を描き、「表情」も明るいものが多かった。

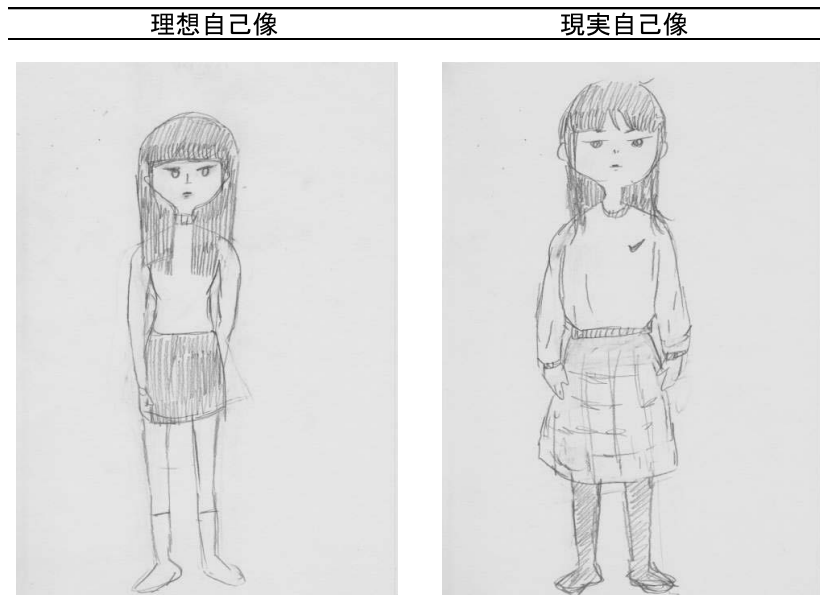


Figure 2. AN傾向高群に典型的な「理想—現実自己像描画」

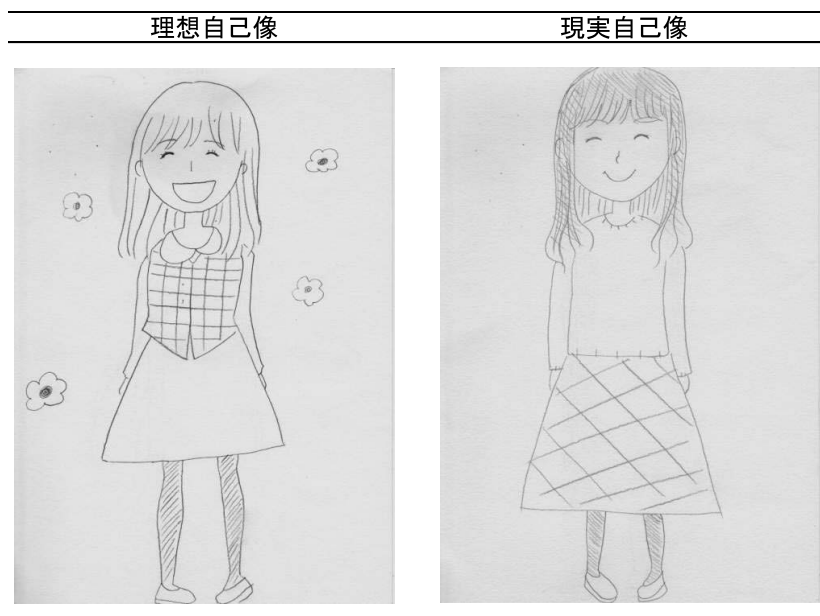


Figure 3. AN傾向中群に典型的な「理想—現実自己像描画」



Figure 4. AN傾向低群に典型的な「理想—現実自己像描画」

考察

「理想—現実自己像描画」の一般的特徴 研究2では、描画を用いて自己の理想と現実の不一致を検討するため、「理想—現実自己像描画」を考案した。その形式分析では、顔などの身体部位の「抹消」が理想自己像に多くみられた。これは理想の自分を描く際に生じた、何らかの身体部位を描出することへの無意識的な反応であると思われるが、その背後には理想のボディイメージが実際には漠然としていたり、現実とは異なる自己の理想の姿を視覚化することへの葛藤や抵抗が存在することが推察される。

一方、調査対象者の約9割では、2枚の自己像のサイズがほぼ同じであったことから、サイズには自己の理想と現実の不一致は表れにくいものと思われる。よって、2枚の自己像のサイズの差が大きくなるような場合は、無意識的な水準で理想の自己が肥大していたり、現実の自己を卑下したりするような心理臨床的な問題が考えられる。

また、全体的に現実自己像よりも理想自己像に女性らしい表現が多くみられた。このことから、今日的女子大学生の多くが身体的なレベルで女性らしくあることを理想としており、理想とする自己の姿を描く際にも、そうした願望・欲求が表出されやすいことが推察される。特に「表情」や「目」の部分を強調することで女性らしさを表現しようとしたり、「胸」や「ウエスト」といった身体部位が、女性らしさの象徴としてイメージされやすいことがうかがわれた。

AN傾向と「現実—理想自己像描画」の関連 形式分析の結果、AN傾向高群の理想自己像では、顔などの身体部位の「抹消」が多くみられたことから、理想とする自己の姿を目に見えるかたちで表すことに対する葛藤や抵抗が、AN傾向が高いほど強かったり、理想の自己イメージが実際には漠然としていることが推察される。逆に、AN傾向低群では、いずれの自己像においても「運動」

の表現が多くみられた。人物像における「運動」は「自分が直面した状況に応じて行動を変えていく可塑性のある人の描画に多い」（高橋，1974）とされており，AN 傾向が低い女子大学生の心理的な健康さが自己像にも表れやすいことが推察される。なお，本描画法における2つの自己像のサイズには，AN 傾向との関連が見いだされなかった。

また，AN 傾向高群では，理想自己像において「胸」や「ウエスト」を強調することで女性らしさを表現しようとするものが少なくなかった。これらは女性の性的魅力をアピールする身体部位でもあることから，AN 傾向の高い女子大学生は単なる痩身だけでなく，性的魅力も感じさせるスリムな体型を無意識的に求めており，AN 傾向と男性からの視線（好評価）を意識した心性や社会に受け入れられるための伝統的な性役割との関連などもうかがわれる。しかし，その一方で高群の理想自己像では，「表情」で女性らしさを表現しようとするものが少なかったことから，無意識的な水準で自己に対する自信のなさや不全感を体験している可能性がある。

なお，森・石田（2013）では，AN 傾向の高い女子大学生の人物画には性差表現が少ないことを明らかにしたが，本描画法では理想の自己像を描かせることによって，女子大学生の女性らしさに関する無意識的願望の様相が示されたことが考えられる。よって，単なる人物画ではなく，理想の自己像を描かせる本描画法の心理アセスメントにおける有用性もうかがわれた。

他にも本研究では，EAT-26 得点と PDI における「描画に示された理想自己になれると思う確率」の間に負の相関がみられたことから，AN 傾向が高い女子大学生の中には，描画に示したような理想の自分になることが実際には難しいと感じており，現実の自分と理想の自己イメージの不一致が大きい者が少なからず存在するものと思われる。また，高群では PDI の「この絵のどこに理想を表しましたか？」という質問に対して「すらりとした脚になりたい」，「くびれがあったらいい」など，理想自己像で体型に関する理想を述べるだけでなく，「二重の目にしたい」など現実では変えることの難しい身体部位における理想を述べる者もみられた。実現不可能な水準で自己の身体に理想を求めるような状況では，現実とのギャップもより強く感じられやすいことから，AN 傾向の高い女子大学生では不適応問題が生じやすいことが推察される。

総合考察

本研究の成果

本研究では，質問紙と描画法を用いて女子大学生の意識的な水準から無意識的な水準における自己像について検討し，AN 傾向の高い女子大学生は，現実よりも痩せた体型を理想としやすく，自己不一致が生じやすいことが示された。また，筆者らが考案した「理想—現実自己像描画」を通じて，単に痩せているだけでなく，胸やウエストなど女性の性的魅力をアピールしたい無意識的な願望も有していることが明らかになった。しかも，こうした傾向の高い女子大学生は，理想の体型を実現することが難しいこともどこかで自覚しているため，理想と現実のギャップから自己不全感や自信のなさを体験しやすいことが推察される。そして，それでも理想の体型にこだわり，それに近づくための行動がエスカレートすると，深刻な AN 状態に陥ってしまうおそれがあると思われる。

よって、AN 傾向の高い女子大学生に対しては、理想とする自己イメージが身体、特に体型に集約されやすいことに気づかせ、その願望を緩和していく方向での支援が必要になると考えられる。

今後の展望

本研究で用いた「理想—現実自己像描画」は筆者らが考案したものであり、その描画特徴はまだ十分に検討されていない。今後もデータ数を増やし、今日の女子大学生における標準的な描画特徴を明らかにする必要がある。その際には、女性の役割認知などが心理的な発達とともに変化していくことを考慮して、本描画法を女子中学生や女子高校生にも実施し、描画特徴の発達の变化を明確にしていく必要がある。

また、本描画法の心理アセスメントにおける有用性を高めていくためには、AN 傾向以外の心理的特性と描画特徴の関連も検討していくことが重要となる。さらに、本研究では、数量的な視点から2つの自己像の特徴を検討したが、今後は PDI への回答などによって、質的な側面から描画特徴に投射されやすい意味を明らかにしていく必要もあると思われる。

引用文献

- 吾妻ゆみ・大野弘之・稲富宏之・田中悟朗・太田保之 (2002). 女子大学生における食行動の実態とその社会・心理的要因について 精神医学, **44**, 521-527.
- 浅野千恵 (1996). 女はなぜ痩せようとするのか：摂食障害とジェンダー 勁草書房
- 馬場安希・菅原健介 (2000). 女子青年の瘦身願望についての研究 教育心理学研究, **48**, 267-274.
- 古山知恵美 (2003). 摂食障害傾向と性役割認知との関連について：年令差の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学, **50**, 342-343.
- Higgins, E. T. (1989). Self-discrepancy theory: What patterns of self-beliefs cause people to suffer? In L. Berkowitz (Ed.) *Advances in experimental social psychology*, **22**, 93-136.
- 川上夏希・石田 弓 (2011). 理想自己と現実自己の差異が自己受容に及ぼす影響を緩和する要因：現実自己のメタレベル肯定および差異の認知に対する自己評価の視点から 広島大学心理学研究, **11**, 259-277.
- 小平英志 (2002). 女子大学生における自己不一致と優越感・有能感、自己嫌悪感との関連 実験社会心理学研究, **42**, 165-174.
- 三根芳明 (1990). 摂食障害者の絵画表現について—神経性無食欲症と神経性大食症との比較— 芸術療法学会誌, **21**, 135-146.
- 森 優衣・石田 弓 (2013). 女子大学生の神経性無食欲症傾向における人物画の特徴について 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, **12**, 100-113.
- Mukai, T., Cargo, M., & Shisslak, C. M. (1994). Eating attitude and weight preoccupation among high school students in Japan. *Journal of child Psychology and Psychiatry*, **35**, 677-688.
- Rogers, C. R. (1959). A Theory of Therapy, Personality, and Interpersonal Relationships, as developed in the Client Centered Framework. In S. Koch (Ed.), *Psychology; A study of a Science*, vol.3. Formulation of

- the Social Context. New York: McGraw-Hill. Pp.184-256. (伊藤 博 訳編 1967 ロジャーズ全集 題 8 巻 : パーソナリティ理論 岩崎学術出版社)
- 大森智恵 (2005). 摂食障害傾向を持つ女子大生の性格特性について パーソナリティ研究, **13**, 242-251.
- 齊藤千鶴 (1999). 青年期女子の痩せ希求行動-性役割同一性との関連 白百合女子大学発達臨床センター紀要, **3**, 24-34.
- 齊藤千鶴 (2004). 摂食障害傾向における個人的・社会文化的影響の検討 パーソナリティ研究, **13**, 79-90.
- Strauman, T. J., Vookles, J., Berenstein, V., Chaiken, S., & Higgins, E. T. (1991). Self-discrepancies and vulnerability to body dissatisfaction and disordered eating. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 946-956.
- 鈴木公啓 (2014). 新しいシルエット図による若年女性のボディイメージと身体意識の関連についての再検討 社会心理学研究, **30**, 45-56.
- 高梨雅春 (1974). 描画テスト入門—HTP テスト— 文教書院
- 高橋雅春・高橋依子 (2010). 人物画テスト 北大路書房
- Thompson, M. A., & Gray, J. J. (1995). Development and validation of a new body-image assessment scale. *Journal of Personality Assessment*, **64**, 258-269.
- 横山富士男・金子元久・熊代 永・青野哲彦 (1988). 神経性食欲不振者の自画像の検討 (24 回日本心身医学会東北地方会演題抄録) 心身医学, **28**, 451.
- 横山知行・小山智子 (2005). 女子大学生における摂食障害傾向と怒りおよび完全主義との関連 新潟大学教育人間科学部紀要. 人文・社会科学編, **7**, 165-174.